

啓蒙知惠乃環人

福岡第一師範學校
(學校圖書)

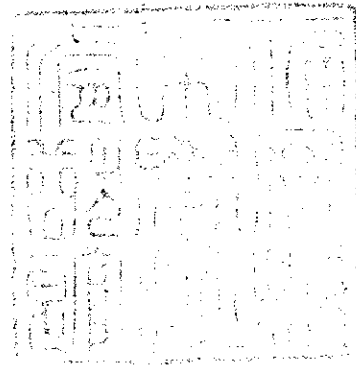
登錄號	第	號
自然科學		門
生物学		部
總記	第	項
目		次
全	3 冊 / 內卷 3	冊
分類號	第	號
460.8		

024889

T1A1

40

U 89

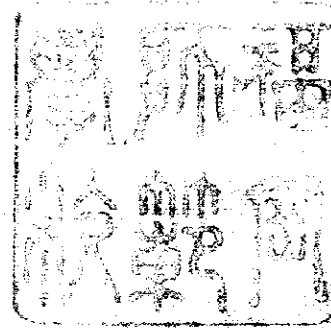


圖書 和図書 迦



a 1 3 8 0 3 2 5 4 6 5 a

福岡教育大学蔵書



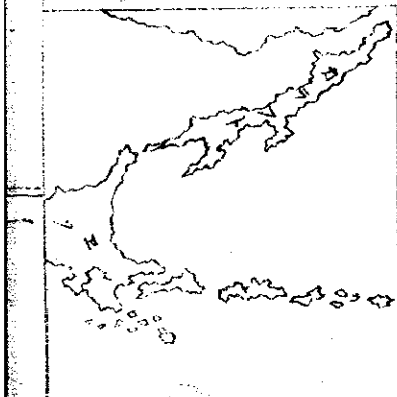
啓蒙知恵の環卷の三

於菟子 譯述

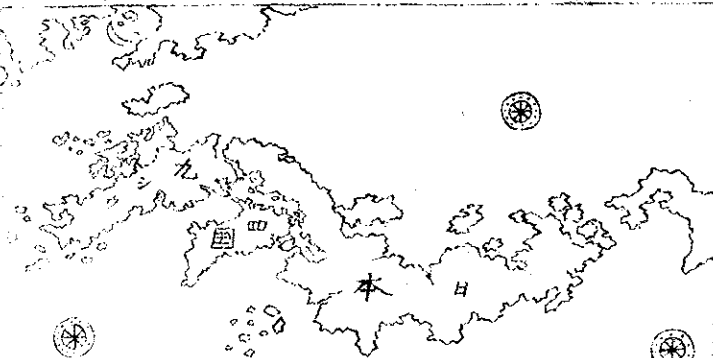
第十八篇 國政論

第四百四十四課 日本論

皇國の古一ハ大八洲國と
いひ後ハ野馬臺中ハ益一
復ヤ一ハの轉化アリ日本
号ハそのとなハ最古ク
太陽の生り出せるの本



處といふ意なり今區別して
八十四州となり中ふ就て
城州ふ西京とわき武藏の州
ふ東京より政一君より出て
萬姓とち星拱一
皇統ハ日の御繼神の御種の
と承け繼ぎ玉ひる萬世易る
るや官制政體ふ至つて
い古今沿革あり今現ふ改革
新救の日ふ當る



第四百十五課

英國の論

英倫蘇格蘭阿爾蘭の三邦を合せて不列顛國と
いふ英國のこやむるその政令法度ハ議事上下
二院の定むる處ふ由る此二院一つハ上院又公
侯院と名づけ一つハ下院又平民院と名づく其
評定も法律等と必以國王の批准代經るふあ
らど彼て國內ふ施行ふこやむる
第四百十六課 惡事をなむるのれ論
國法を犯すもの刑罰を受べ一英の法みても
別人の物を竊と取る賊偷盜といふて其の罪状

治まるふ禁獄の科を以て假單や別人の筆
跡名字仮仮りて欺詐をなすもの外邦へ流罪
や謀叛人殺を犯すもの死罪は處あるとい
ふ

第四百十七課 立合役吟味の論

立合役吟味の法は不列國にある一の良法を
り其法の裁判所は於て裁判役事を裁判する時
民間より十二人出で其坐ふ列り訴訟をつまび
らるふ聞糾以て訴へらるる人の罪あると否
ざるやを決断する所此十二人訟の辭と聽き

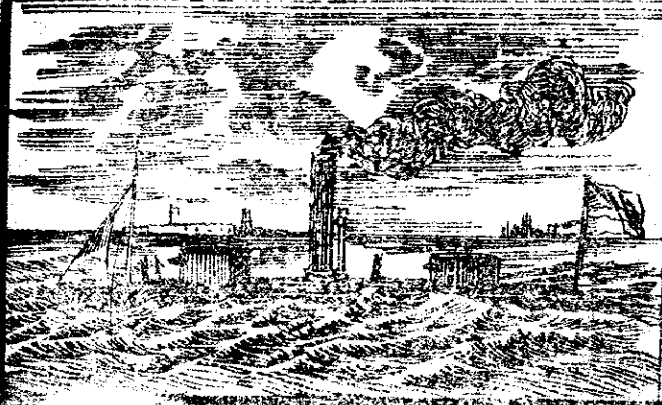
證據を辨訴供を察し然る後その罪の有無は
定めて裁判役上達せしむる於て裁判役法を
照して案を定む

第四百十八課 戦の論

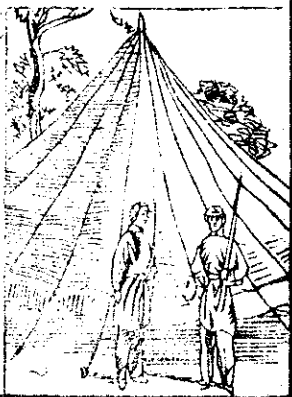
凡そ國の災ひは戦より重きをのへらば戦ふ
とたる人殺し居宅を劫り田地を變て荒
蕪なり城邑村郷を多く焚燬らば且富るもの
試してはづから免妻をして其夫をうり
えしめ兒女をして其父母を喪せしめ其他諸般
の惡事災難多くは戦より出来ること多し

第四百十九課 陸軍及び海軍の論

陸軍は騎兵歩兵砲兵あり多
幾大隊より分ち其數甚多
禁國を衛り餘ハ八鎮臺の
本營分營等に於て國家の
不虞は備へ人民の安隱を
護る海軍ハ軍艦あり居り
の防を爲し兼て海内を周
して商人の貿易と保護と海



陸軍を小其兵老年なり
一其の或ハ傷を受しもの等
ハ朝廷の恤養あり生涯
を送らしめ玉ふあり



通金本邦の新金銀銅鐵以て鑄造玉へ
り二十圓十圓五圓二圓一圓の金あり一圓五
十錢二十錢十錢五錢の銀あり一錢半錢一釐
の銅錢あり厘ハ錢の十分一圓の百分一釐
り故ハ十厘ハ一錢として百錢ハ一圓あり往日

より通用せし一兩に即ち今の一圓ふて一歩
今の二十五錢一朱も今の六錢二厘五毛ふ當
るあり又金にあり夫々通用に

第一百五十一課 家産の論

房屋家財書籍畜類田地林木及び製造を其處の
諸器等にこれを出を家産といふこれと父母或
の親朋より傳へ受くるものあり又自己の敏
勤ふ由り得るものなり世ふ餘分の金を持つ人
は毎ふ若手の財を損く國家に有用ある業と人
代濟ふの善舉との助勢を爲せありにや

院又各鐵道を起し等のことのおうは是あり

第一百五十二課 租税の論

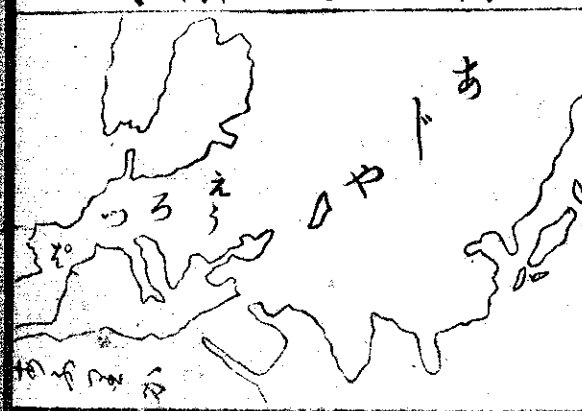
租税は民より納むる錢ふて以て國の用は供
するものなり凡家業に安んじ保さんことを欲
し強奪詐偽に遏止んことを欲し律法を行むん
ことを欲し國を平く治まらんことを欲する
人の情なり其爲ふ諸官員ありて民に代つて
これを治め以て人々ふ其患をあらむ其有
の禄は則ち聚むる處の租税より宛行ふなり

第十九篇 列國の論

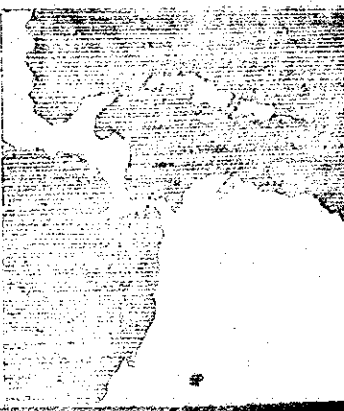
第百五十三課

の論 亞細亞歐羅巴の二洲諸邦

地球の面を五大洲に分る
 細亞といひ歐羅巴といひ阿
 非利加といひ亞墨利加とい
 ひ太平洋といふ此五大洲の
 うち又各々邦國を分つ
 こゝ甚多し亞細亞洲に属
 する國の著るものは日本
 支那印度暹羅波斯亞刺伯土



耳其等なり歐羅巴洲に属す
 る國の名を魯西亞地刺
 魯士是班牙葡萄牙以太里不
 列顛佛蘭西比利時和蘭等



第百五十四課

の論 三洲諸邦の論

阿非利加洲に属する國の著るものは埃及巴
 利幾内亞よりその極まで南なるは即ちハ
 白の真望峯尼給魯倫阿比西尼亞等邦を亞墨利

加洲カウ小属ゾするもの合衆國カウ加拿他カウ墨西哥カウ巴西カウ等の邦カウあり唯大洋洲カウ小属ゾする處カウに國カウを稱カウせし
 一てミ那島カウと名づく三大部類カウに分ちて東なる
 を波里尼西亞カウといひ西小あると馬來西亞カウとい
 ひ南小あると澳大利亞カウといふあり

第百五十五課 野劣なる國民の論

世カウに甚カウ野劣カウなる國民カウありその民カウ全く教化カウなくて
 獸皮カウを衣服カウとし野山の菓草カウの根カウを食カウとし或カウは獸カウを獵カウて



其肉カウをやる亞墨利加カウ南北の
 二洲カウ澳大利亞カウ新西蘭カウの二島
 小く其土人カウも是野拙カウなる
 るがやかくのひと阿非利
 加内地カウの黒人カウも大半カウは然カウりと



第百五十六課 野遊する國民の論

國カウ小都城カウなく定カウりたる住處カウなくてその民諸
 方小遊徙カウき葛草カウと尋ねまわつて羣畜カウを牧カウし
 或カウは罽カウ隙カウを伺カウひ隣部カウを侵カウし戦カウふものと皆野遊カウ

の國やいふなり阿非利加、韃靼、亞刺伯、波斯等の
 砂漠、小別地、ふ比ぶれを多く去るあり其間ふ
 或は村落をなすものもあり、田を耕し、産物を
 以て歐羅巴より製造する貨物や交易を

第百五十七課 半ば教化を被りたる國民

の論

國ふよりて其民格物致知、ふおめ、既小畧得る
 所あり教化政治、於てを以て、稍々行ふや、こ
 りといへども、僅ふ其偏を得て、いまだ其全き
 を得ざるものなり、阿非利加の數國、亞細亞の印

度、波斯、土耳其等の國のおや、はるる然り、かく
 のこときの國、其人よく田を耕し、頗る工藝を
 識り、法律あり、書籍あり、惟有用の藝術、おあて
 いは、達せざる所あり、亦風俗、も慘酷き、おや、少
 うらば

第百五十八課 教化を被りて頗る全き國

民の論

是班牙、葡萄牙、以太里魯西亞
 波蘭の數國、ハ教化を被りて
 頗る全きものや、稱を盡し、只



第百五十九課
交易の論

諸國の産物同ト多ク米を産するあり多ク

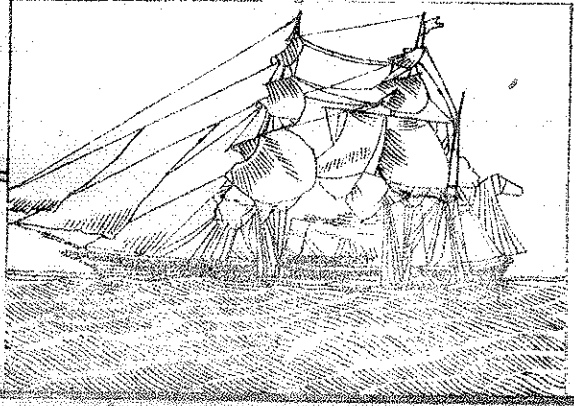
く麥コムギ産えむるあり多く葡萄ぶどうと産えむるあり無花
果くわい橄欖かんらん東とう橙ちやう柑かん香料かうりやう茶ちやう加か非ひ素そ麻ま棉めん花か糖たう烟えん葉えつ草そう樹じゆ
膠かう等とうの物ものと盛えいふ産えむる邦ほうもあり又また國こくふよりく
いぞの製造せいぞうの品しん物ものふ因よて名なと得えたるものもあ
り一いつ國こくの産物えんぶつと以もつて他た國こくの物品ぶつひんや易いふるもの
を交易かうぎといふ

本邦輸出の品ハ鐵銅木臘石炭蠶卵生絲真綿茶
昆布膠菜乾海老鯨干鮑材木樟腦及び製造の物
漆器陶器等ヲ輸入の貨ハ錫亜鉛鉄葉水銀

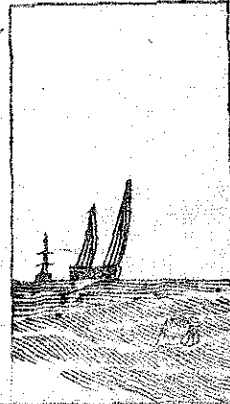
藤油類石礮硝子類象牙珊瑚琥珀甲金巾更紗唐棧
 羅紗吳服羅襪革細工樹脂細工書藉染料藥種
 酒類砂糖類南京米其の外穀類及び都て機巧の
 器械日用の器等一々擧て數へるに英國少く
 輸出の品の鐵銅塩及び製造の物輸入の品へ葡
 萄酒茶棉花材木金銀等あり佛國輸出の品へ葡
 萄酒燒酎菓實及び彩飾の貨等輸入の品へ棉花
 加非香料あり魯國の輸出品へ熱帶の脂油皮革毛革及
 び麻等あり輸入品へ多く熱帶の產物製造物等
 あり支那の輸出の貨へ茶絲等ふして輸入の貨

棉花木綿糸布足等あり
 國々相隔て其間ふ洋海の論

水あるもの多き船を用ひ
 て往來をべきなり其の船帆
 と揚げ風小藉りて行くもあ
 り又機械を仕掛て蒸氣を因
 て動くものもあり或は人と
 載せ又荷物と運送に船中
 商人の所持のもの多し船中



ふて働くものと水手やいひ
船を管する人と船頭といふな
り



第百六十二課 機械の論

世に機械の便利をなすや甚だ廣く或は人力
の能くする所を補ひ或は其のこまの勞苦と繁
費と減省し既ち弊あり利あり及び打木の機械
も亦を餘長柄の鉤及び連枷の苦を省くもの
一蒸氣車鐵道及び車あり亦馬に負ふの勞を省
き人の歩むの勞を省くものなり

第百六十三課 言語の論

心は欲するやこころ心と思ふところ及び心は感
ずるや言はるや言語を以て言顯をあり人物動
物居所諸徳諸惡その外端緒ありて指の指べき
ものいみ言語を以て各々其の名を附くるこ
とや能はざるや言語小物の形容をあらは
せるものあり剛き柔き新き舊き等のおとむのこ
と又一動きがあらうハ其の何れ切る光るの
や一口も言ふおとく文字よて之を寫くおと
も得べし

歴史の論

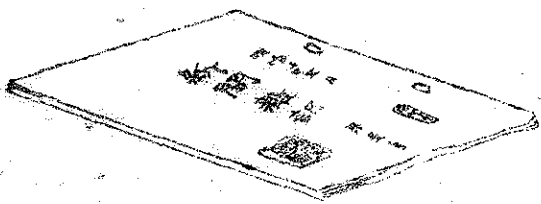
歴史といはれし往時の事と述べて書るに其至つて古
 き者は世を如何して創めたるやの傳記を
 其の至つて肝要なるものハ天理人道の神教
 あり我日本の歴史ハ天開き地開け日月の現
 出より載せて代々の帝王の盛績偉勲古今の
 成敗得失忠臣孝子姦邪の跡等と記し其の長さ
 人皇の第一
 神武天皇元年辛酉より數えハ今年辛未まで二
 千五百三十一年あり英國の歴史ハ凡そ一千九

百年支那の歴史ハ四千餘年の世ありといふ

第一百六十五課

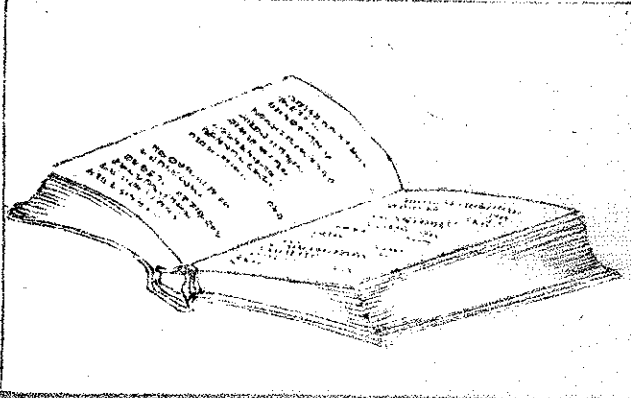
新聞紙及び書籍の論

人の知識見聞と廣むるもの
新聞紙と書籍と若くは形
近來新聞紙多く出來書物
の出版も益を盛んし
教道藝術に益あるもの日々
小多し新聞紙は災害罪咎生
死職業商法發明玩喜の
より其外一切人小益あり人



と娛まゝしむるをやハ盡く載
て漏まをす多く實み家を出
ずし世の故坐るから知識
まなまのなり書物を作る
る一つあま人を教へ一つふ
人の情紙快ふまる為のも
のみく人よく之を讀まば必
ぞよく其知識は増し必だよ
く其幸を大ひふせん

第百六十六課 身と脩る論



身と脩るハ人間第一の務なり其法ハ他ならべ
博く學ひ力えて行ひ耳よく聞き目よく見るハ
何の事業ハ拘らむ真實ハ心を用ひて事
らふ務る時ハ其の身上達せざるあまなく尊卑
貧富といふ人々を愛し天ハ順ふ心常ハ絶えど
る時ハ其徳増益せざるこやあ

第二十一篇 物の質及び其動き等の論

第百六十七課 物の質ハ分性あり論

宇宙の間ハあるところあるものハ歸するところ
る只有形無形の二種の二形あるものハある

み形常小結び聚る炭水石等の二やれを云其
今子此引力のふふ凝り聚る形と成を云之
以凝集引力といふ物の地小附いう動ざるを
形もち地の引力ふ因る之以吸集引力といふ地
の口以旋つて行ふ亦日の吸集引力小頼るなり
海綿いよく其小孔と以る水と吸ふ水と毛管
引力すいふ

第百七十課 物質各異なる論

凡そ物ハ重あらざるを云一其質ふおて各
各々異なり物ふより軽きに又其重きを

のり又甚ど硬きものあり玻璃鐵のかき是を
又甚ど軟き者ハ抹紙膠鯨骨のる是なり又
甚ど脆きものあり玻璃磁器の類是なり又
丹手搗て落とるにべきあり又線條とるに
毛の形

第百七十一課 物の動く論

物の動くといふ其居處と易ふるを云あり
ハ動て物身小運り心の臓動て血吐納肺の
臓動る氣を呼吸し物ハ激しく動うむる其
激するを力すいふ球ハ撃すいよく動く滾行る

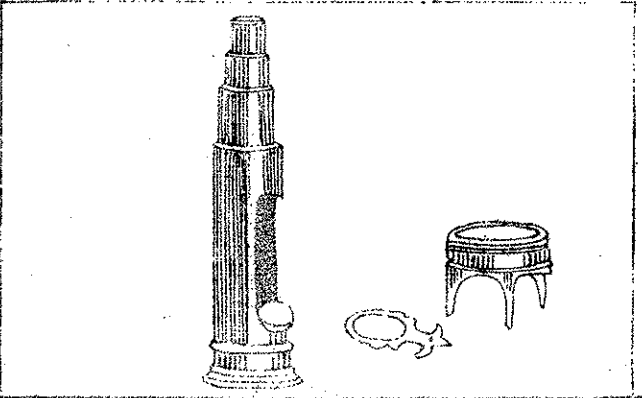
り撃つハ即ち人の力なり物とづから動くこと
 あり他の力を待てよく動くものなり動かしむれ
 ば止まるに終つた物の情性なりいふ
 止まるに終つた物の情性なりいふ

第百七十二課 物の形の論

物なる形あり或ハ直ク或ハ曲リ或ハ正しく或
 ハ正しく或ハ曲リ或ハ正しく或
 球ハ正しく或ハ曲リ或ハ正しく或
 角ハ正しく或ハ曲リ或ハ正しく或
 正しく或ハ曲リ或ハ正しく或

第百七十三課 物の大小の論

物ハ各々大小あり人の建
 築く物ハ至て大なるもの
 あり一とど其物を築きさ
 國ハ較ぶれば小なり何程大
 ひある國も之と地球ハ較ぶ
 ずる大陽ハ較ぶれば又小
 大陽ハ至て大なるといへ
 宇宙ハ較べれば至る小



又物の細小なるに至るの顕微鏡を市をに見るは亦ある

第百七十四課 物の寸尺の論

凡そ物多くハ尺度を用て其大きハ尺度るべ
尺の内ハ寸あり寸の内ハ分あり分の内ハ厘あり
十分を一寸とす一寸を十とす一尺とハ尺ハ曲尺あり
鯨尺あり布帛類ハ鯨尺を用ひ地面を量るハ曲尺を用ひ
等物ハ曲尺を用ひ地面を量るハ曲尺を用ひ
數里數ハ用ひ

第百七十五課 色の論

見る所の物皆色あり天ハ青水ハ白藍色ハ草ハ
緑ハ血ハ紅ハ虹ハ其數七色あり其の中ハ只
紅藍黃の三色を正ハ色トハ餘ハ此三色
の相雜つて成るものなる白ハ色ハ算へた
黒ハ乃ち色の悉く絶えざるなり

第二十二篇 機械力の論

第百七十六課 桿の論

諸職人ハ形器ハ機械を用ひて其の働の助ハ
其中ハ桿と名づくるものあり重き物ハ舉動ハ



欽を以て物と剪るふい先づ其兩股を指ふ挾ぐ
 力を出は乃ち是二本の桿あり轆轤師其車を旋
 らせふ脚と以て踐ぐ其力を用ふ龍吐水の柄を
 乃ち桿の曲せるもの形を手を以て持の端はあ
 るをげしる力を生む鎮技を用ひて鎮釘を抜く
 も亦曲せる桿となるものなり

輪と軸とが用ひる重き物と舉ぐる仕掛あり船
 の上ふありて此器を名づけ絞盤といひ
 鍊或は綱と絞盤に繫け鉤とぞめ鍊の先は繫
 以て之を舉げ降ふ用ふ千斤稱車と車磁石と亦
 輪と軸と相合ふる用を爲まる事

板を一人毎梯とまつく斜ふ
のちて貨物と滾（ころ）がり稍高き
處へあちきけまるものを斜



板といふ船試水小卸を小を
 斜板試用ふ帽子いよく木試
 裂く小用ひ又石炭山石礫小
 入れて開き割る小用ふ又
 之試名づも矢を入るや



第百八十課 螺旋及び滑車の論
 螺旋を壓盤ふ多く仕懸桿を以て之を旋轉して
 上げ下をも螺旋の線條いその全軀ふ高く凸起

のよりも一段轉一易一と滑車も重き物を舉
 る小用ふ索一條ありてその上を繞ひ通り索の
 行ふ隨て滑車自ら二級や同下く轉るなり

第百八十一課 機械裝置の論

機器い如何ふ至妙小造ふといへどもさばあら
 動うゝあるさやあさふ必は他の力試用ひて
 始めよく運轉の功を致すものなり其用ふる
 力い人力風力水力蒸氣力等なり車礫石の如き
 人の手ふる之と轉一風車い風の力を用ひ水

車い水の力とて動力き蒸氣機械い蒸氣を用
 て運る如し若し其力暫く絶ざるを要するに
 機械い力のばる止るあり
 第百八十二課 機械力の用あは論
 機械い力と省き時省くもの形假如槌を用
 ひる釧と打石礫を用ふる小勝り車砥石小
 鑿磨い平石を用ふる小磨さる鋸と以て木を
 挽割るい斧と以て走る小まきり且つ木材と費
 せば車鋸と用ふる又手鋸より巧みとて且
 捷きと云ふ

第百八十三課 天然の機巧の論

動物の軀は觀るふ天然自然
 機巧の裝置と具ふるは實
 不多し人の手足い即ち是桿
 の類ふて幾つ又こげうら
 動く力と具ふ橋拱い極と通
 り合せて成るふごとく人の
 足の拱もまた極と合せて成
 る動物の牙い即ち自然の又
 物あり蟲類の中ふ螺旋空



錐と器具へて能木や石と穿つものもある



第二十三篇 五官の論

第百八十四課 眼の論

人の身は五官あるを視聴嗅味覺の五を司るものなり
その中視るは目と司るは目あり人目あるは
天青草美花を見て了然と何物といふ見分け
形多しや得るは衆目の見へぬものを盲と
盲者を實に哀むべきものなり

第百八十五課 聴言との論

聴は言を司るものなり耳あり人耳あるは
小物の聲人の言と聴き絲竹の音を辨ふべし
兒女人の言と聴き其聲小効ふて遂ふよう
ふこそは覺る生れるら耳のさあえぬと
いふ啞者の言ふこそはあもざるは初めより
くあやあやとざるは故ある其心ふ思ふ處は直
小其物を指し或は手勢物模し人小合意せし
むるのこある

第百八十六課 味ふと嗅との論

味ふにや、司るハ舌と上顎との能なり。嗅ぐを司るハ鼻の用なり。人よく味ハ嘗臭と嗅ぐをゆえ。食物の食ふべきと食ふをうくざると知る物の味ハ各相異なるものあり。醋ハ酸く、膽ハ苦く、砂糖ハ甘き。如く物の臭ハ亦然り。香ハきものあり。臭きものあり。

第百八十七課 覺の論

覺ることを司るものハ全身の皮膚形を指と舌の尖とる物ハ感ト覺ゆるを尤甚く。人既ハ物と覺ゆるを故ハ都て物の硬軟粗滑冷暖燥濕利

鈍等を知るあり。覺るといふ又心ハ附ても言ふべし。頭痛切傷打傷火傷等あらば、其苦と覺ゆ。やいし身子平和暢快なるとき、則ち其樂と覺ゆといふ。

第百八十八課 五官の用ある論

五官ハ獨り人のとある。ああらば、都て動物を之と逐ひ尋ね、諸動物を食を食うものなり。嗅ぐくも、凡そ人の覺識ハ多く、五官より得るなり。思ふと心ハ生むといへども、詞ハ得ら

祿^{ろく}之^のと發^{はつ}せると能^{あた}むるが如^{ごと}く

第百八十九課 身^み躰^{たい}健康^{けんこう}の論^{ろん}

飲食^{おんじき}ふあらざれば身^み躰^{たい}の健康^{けんこう}を保^{たも}つをい
、中^{ちゆう}を若^{わか}し飲食^{おんじき}も過^かせむ其身^{そのみ}を壞^{こわ}るふ至^{いた}る運^{うん}
動^{どう}は健康^{けんこう}益^{えき}あると其^{その}度^どを得^えて過^か不及^{ふく}
らば却^{かへ}り健康^{けんこう}を損^こふ本^{もと}とる氣^きは健康^{けんこう}ふ
必^{かならず}用^{もち}の身^みと清潔^{けつせつ}なるは健康^{けんこう}ふ必^{かならず}用^{もち}の事^{こと}
形^{かたち}も若^{わか}し居^ゐ處^{ところ}の空氣^{くうき}穢^けく或^{ある}へ常^{じょう}の習^{しゆ}俗^{そく}汚^け
垢^かなるや泥^{どろ}へ健康^{けんこう}を保^{たも}つと何^{なん}と云^いふ

第百九十課 身^み躰^{たい}缺^{けつ}たる者^{もの}の論^{ろん}

人^{ひと}の世^よに生^なむる體^{たい}なるものあり聾^{ろう}なるものあり
り駝^た背^{はい}なるものあり跛^へ脚^{けつ}なるものあり斜^{しゃ}眼^{がん}な
るものあり手足^{てあし}彎^わ曲^{きよく}なるものあり身材^{しんたい}長大^{ちやうだい}な
して偉^{わい}丈夫^{ちゆうぶ}と呼^よぶものあり身^み短^{たん}くして矮^{わい}子^しと
名^なづくものあり人^{ひと}若^{わか}し身^み躰^{たい}の缺^{けつ}あるもの
は見^みえ決^{けつ}して之^{その}を欺^{あやま}侮^をるべからば宜^{よろ}しく恤^{あはれ}を
助^{たす}くべしなり

第百九十一課 疾^{やまひ}病^{びやう}の論^{ろん}

一^{いつ}身^みの中^{ちゆう}に彼^か此^し部^ぶ位^い其^{その}功^{こう}用^{よう}宜^{よろ}きふ適^{たふ}ふをい其^{その}
身^み健康^{けんこう}なる若^{わか}し一^{いつ}處^{ところ}も其^{その}運^{うん}動^{どう}常^{じょう}形^{けい}を思^{おも}ふ

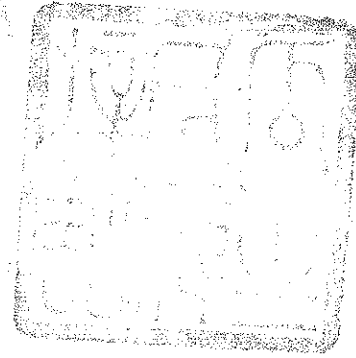
あをを則ち病とある力と勞を多し其多
飲食其宜き試得ば吸氣甚く清淨ならん今日の
業ふ神を損ざる等ハ人病一むる本とな
る病の人ふ添過ものあり之を傳添病聖いふ

第百九十二課 死亡の論

身既ふ死す將に五官その能と形をば生る時
靈理あそて物の觸るこゆをば身必む之を
覺ゆ死あるとにハ靈魂身と離れて身覺えば身
を靈魂の二つに配せ一人の人と成る身を見
るべく一ハ靈魂ハ見る處ならん身ハ死を感

一ハ靈魂ハ死をべうらび

啓蒙知恵の環大尾



於菟子譯述

明治五年壬申十月新雕

東京芝大神宮前

和泉屋吉兵衛